

異文化コミュニケーション・モデル(試作)

「目的：1」異文化コミュニケーションの講義・ワークショップをする際には、「文化」の定義や影響力を多少なりとも説明しなければならないと思います。講師・教材開発者である我々が、事前に異文化コミュニケーション・モデルについて考える機会を持つことにより、今後の活動や指導へのヒントになればと思っています。

「目的：2」現在、私が考案中の異文化コミュニケーション・モデルへの意見・input を皆さんから頂きたいと思っています。(ぶっちゃけ、自己都合・自己中心的な目的)

下記のモデルは私が現在考案中のワークショップのレッスンプランの一部です。

異文化コミュニケーションモデルの説明

日本文化 (集団主義、高コンテクスト、ヒエラルキー、不確実性の回避…討議の余地あり)

(サブカルチャー：学生 or 社会人、女性 or 男性、独身 or 既婚者、田舎 or 都会 (地域別特色) …etc.)

+

個性 (性格・資質・経験 (育った環境含む)・知識・能力・趣味嗜好)

+

その時の感情・意図 (イライラしている or Happy な気分、印象よく or 無視しよう 等)

その時の状況 (大勢いる中で or 2人だけ、時間的な余裕がある or ない 等)

その人との関係 (人間関係・上下関係 等)

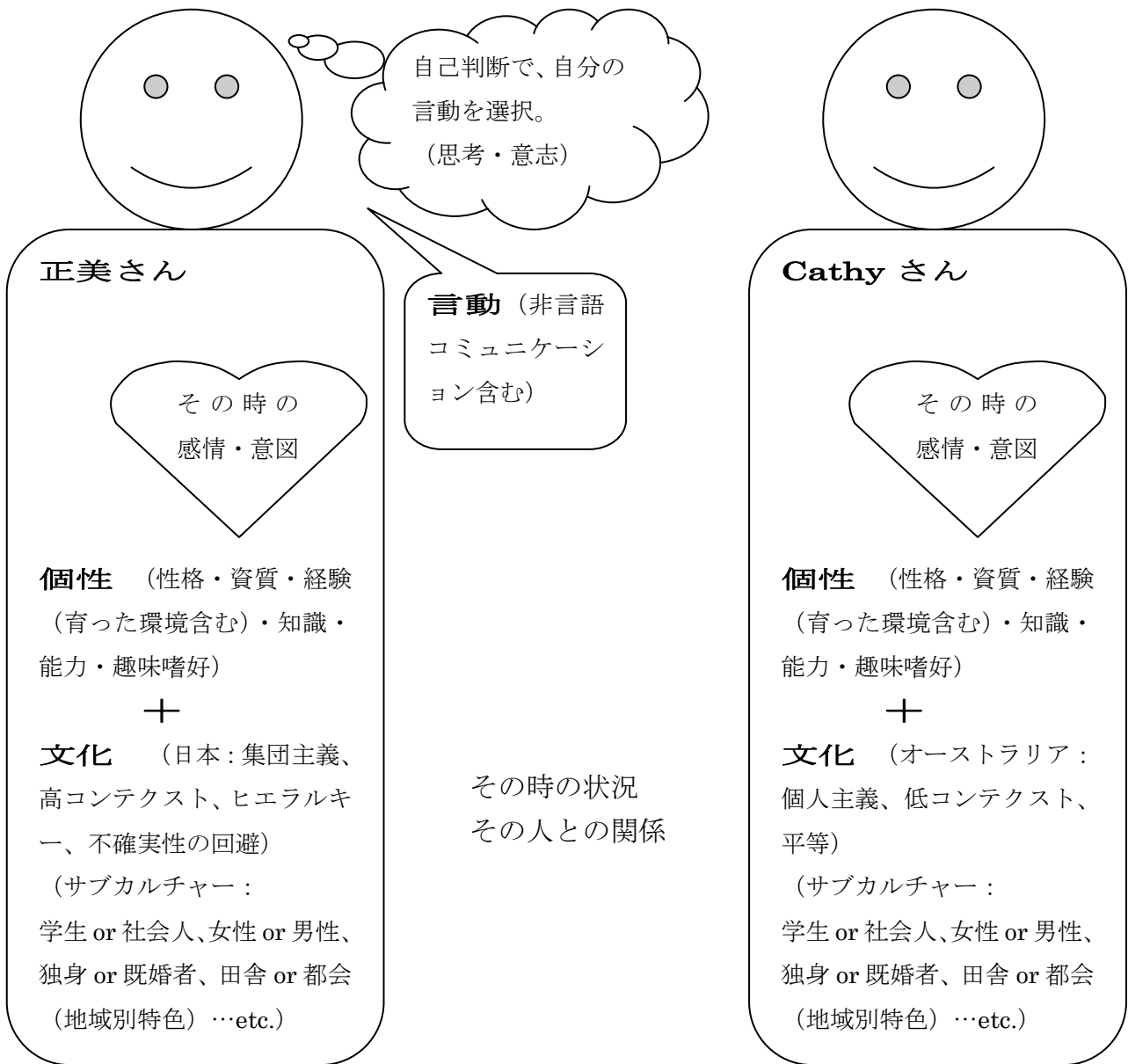
↓

自分で判断し、自分の言動を選択できる。(思考・意志)

言動 (非言語コミュニケーション含む)

言動 A or 言動 B or 言動 C

異文化コミュニケーションモデル 図式化



【ワークショップのねらい】

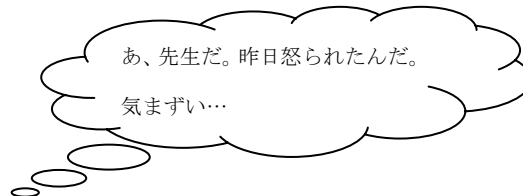
ステレオタイプな判断をしないようにする。

言動の背景にある文化を過大評価しない（すぐに文化の違いだと結論を出さない）ようにする。

異文化コミュニケーションがむずかしいという偏見をなくす。

異文化コミュニケーションモデル使用例①：ステレオタイプな判断への警告

(例) Yさん（日本人）が廊下で先生（外国人）とバッタリ会った時、



一言動一



A: お辞儀（会釈）だけして、その場を立ち去る

B: 「先生、私、昨日家に帰ってから、よく考えてみました。」
と反省点や今後の改善点を話す

C: 「今日はいい天気ですね。」とさわやかに笑顔で先生に挨拶する



他人は Yさんの言動を見て、Yさん を判断したり、日本文化を語ろうとするが、Yさんの言動の果たして何%が日本文化を反映しているか？日本文化以外にも、個性・その時の感情・状況・人間関係など多様な要素がある。（しかし、それらも日本文化的要素は少なからず入っているが…）

言動 A は、言動 B や言動 C より日本文化を反映している??? 疑問→討議要

日本文化を語るには、Yさんの一回の言動だけではなく、もっと多くの日本人の、多様なケースを見てからでなければならない。また日本文化も変容しており、Yさんも自己変容することも忘れてはならない。

異文化コミュニケーションモデル使用例②：「異文化コミュニケーションはむずかしい」への疑い

1. 「異文化コミュニケーション」＝「外国人とのコミュニケーション」と思われている。しかし「日本人同士でも異なる文化背景を持つ者とのコミュニケーション」として考えることもできる。
2. 「異文化（外国人との）コミュニケーションはむずかしい」と言われるが、下記のような例を見ると、外国人とのコミュニケーションのほうが楽なこともある。「〇〇人の誰々」として接するのではなく、まず個人間のコミュニケーションを大切にする。ミス・コミュニケーションがあっても、「文化や国民性の違い」であっさりとは片付けない姿勢が必要。

(例) 東京に住む日本人の正美さん（30代・独身女性）は、田舎に住む日本人の太郎さん（70代・既婚男性）より、オーストラリアのシドニーに住む Cathy さん（30代・独身女性）のほうが、話しやすい、仲良くなりやすい、分かり合える。国が違っていても、4つの共通点があるため。

Claude E. Shannon, Warren Weaver(1949):THE MATHEMATICAL THEORY OF COMMUNICATION

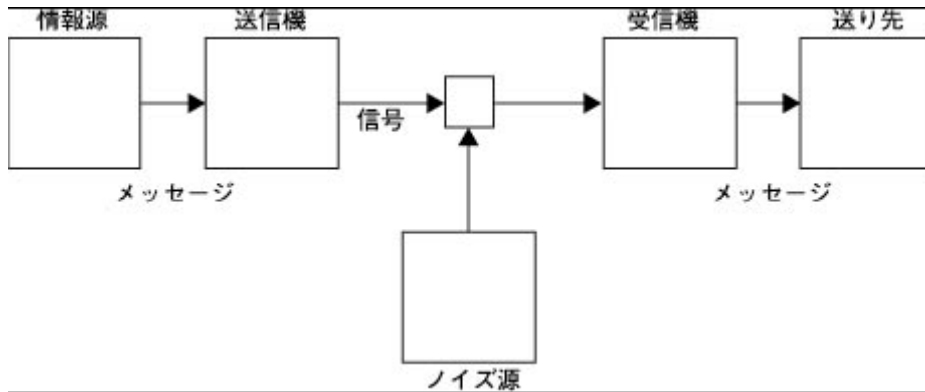
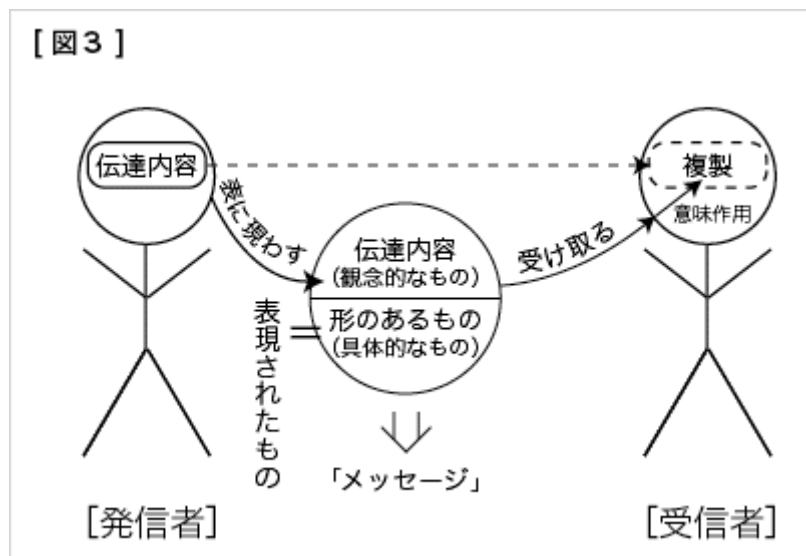
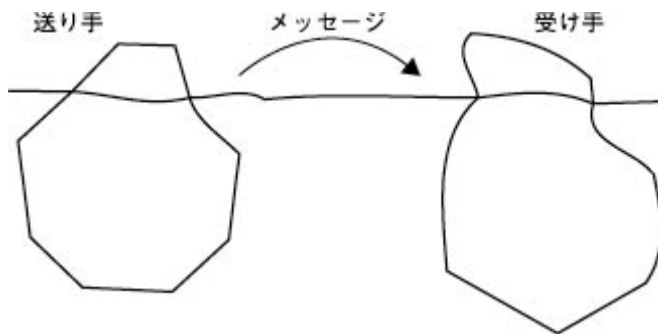


図2 氷山モデル



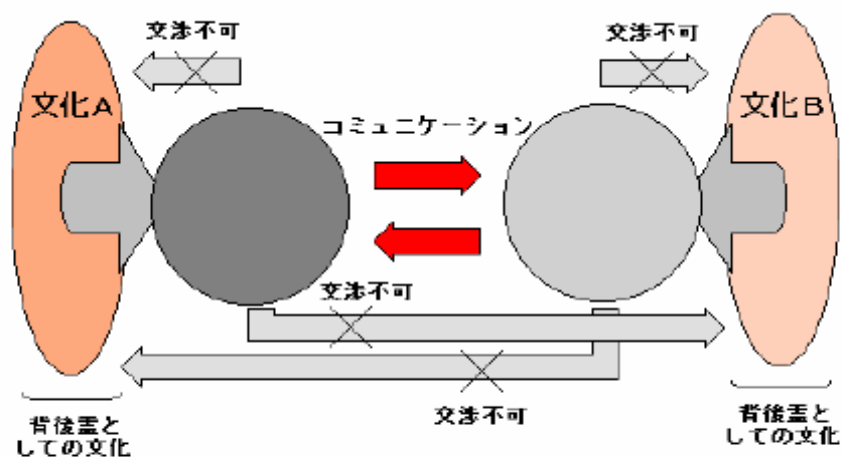
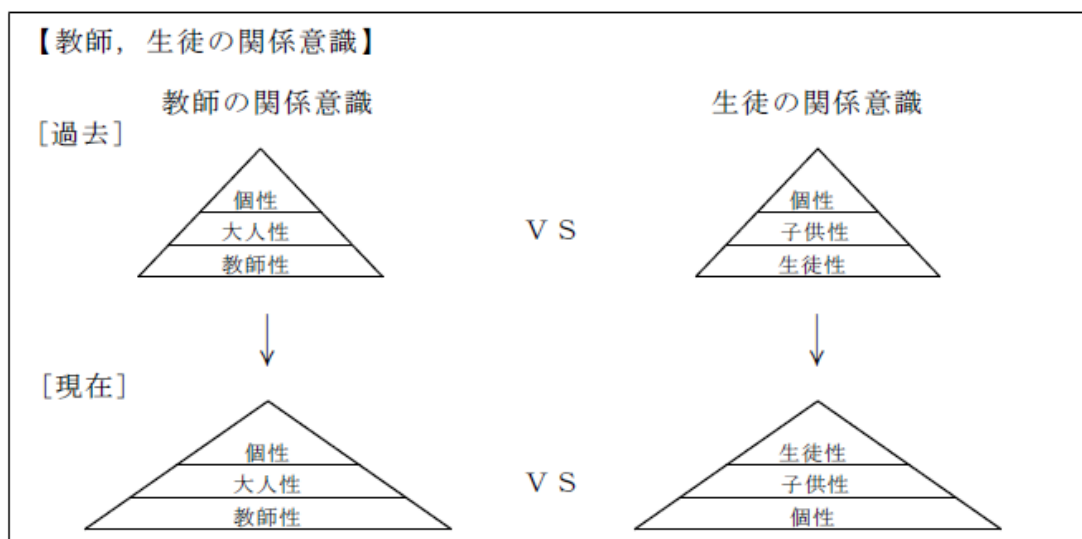


図1：「国際交流」と既存のコミュニケーション・モデル

国際交流におけるコミュニケーションでは、文化は個人に貼りついた「背後霊」として想定されている。このような文化観は「対人コミュニケーション（interpersonal communication）+ 文化的要素（cultural variabilities）= 異文化コミュニケーション（intercultural communication）」とする、上記のモデル化と同一の発想である。氏の説明を私なりに図式化してみると、以下ようになる（図1）